入間川環境保全活動を通じた地域との連携と駿大社会人基礎力の育成

平　井　純　子

１．はじめに

文部科学省（以下，文科省）は2012年より大学に向けた「地（知）の拠点整備事業」（大学 COC 事業）に対し，補助金の支給を周知した。学長の強力なリーダーシップの下，大学が地元自治体や企業等と連携し，地域を志向した教育・研究・社会貢献を進めることで，地域の中核的な役割を担い，大学全体として地域志向に取り組む姿勢を求めたものである。2007年に一部改正された学校教育法第83条2では，大学は，教育研究を行い，その成果を広く社会に提供することにより，社会の発展に寄与するものである，としており，少子高齢化が進行し，生産年齢人口が減少，地方の過疎化にともなう様々な問題が山積するなかで，大学の責務は，教育と研究と「社会貢献」であり，Center of community=COC 機能はすべての大学に求められるものとしている。

駿河台大学（以下駿大）では2012年12月，「駿河台大学憲章」を定めた。ここでは建学時から継承される愛情教育を強調するとともに，地域社会の発展に貢献するための協働について述べており，地域に根差した大学として，豊かな自然・文化に育まれた「地域の教育力」を尊重する，としている。駿大が「教育力の駿大」として，ホームページ上に挙げる事項を見ると，以下の4つがある。

・愛情その１「導入教育」
・愛情その２「少人数ゼミナール」
・愛情その３「キャリア教育・サポート」
・愛情その４「アウトキャンパススタディ」

このうち，社会貢献に直接結びつくものとして「アウトキャンパススタディ」がある。その目的は，様々な活動に参加し，人々と触れ合うことによって社会性やコミュニケーション能力を高め，社会人基礎力を養うことに置かれている。学生が地域社会から学ばせていただくといった側面が出ており，文科省の求める大学の社会貢献とはベクトルが異なるように思われるものの，こうした活動には双方向的な作用がみられるはずなので，その点にも言及すべきであろう。「アウトキャンパススタディ」の具体的な活動として，地域インターンシップ，森林文化実習，まちづくり実践などがある。地域インターンシップは，文字通り地元企業などでインターンシップを行うもの，森林文化実習は，大学敷地内にある里山での間伐や下草刈り，遊歩道づくりを行うものである。また，まちづくり実践は，飯能市や入間市の活動や地域イベントなどの活動に参加するもので，具体的には祭りなどの行事への参加，入間川での環境保全活動がある。この中でも入間川環境保全活動は，地元の漁業協同組合と大学が連携する，というこれまでにない形で活動を行う，駿大ならではのユニークな取り組みである。

本稿では，駿大においてアウトキャンパススタディの「まちづくり実践」の一環として行われている「入間川環境保全活動」を取り上げ，本活動がどのような経緯で地域と駿大との連携してきたのか，学生にとってどのような学習効果につながっているのか，また，地域と駿大との関わりと課題について考察する。

２．「入間川環境保全活動」実施に至る経緯

飯能市は2004年に環境省の「エコツーリズム推進モデル地区」に指定され，エコツーリズムに取り組むこととなった。基本方針として「すべての地域と人の参加」を掲げ，身近な自然や地域の人々の歴史・生活・伝統や文化などを資源とした，エコツーリズムに取り組んでいる。里地里山を舞台としたエコツーリズムは，2008年，エコツーリ

ズム大賞を受賞し，2009年にはエコツーリズム推進法に基づく「飯能市エコツーリズム推進全体構想」の認定全国第一号となるなど，エコツーリズムの先進地として，広く知られるようになっている。

2010年，飯能市エコツーリズム推進協議会の事務局となっている飯能市では，飯能ならではの素材として，内水面の漁業協同組合である入間漁業協同組合（以下，入間漁協）に注目し，エコツーリズムの概念に基づいたエコツアーの実施を持ち掛けた。入間川では，在来魚を食す外来魚のブラックバス[1]が増加し，入間漁協はその駆除を担っていた。外来魚というマイナス要素を自然観光資源として，環境教育の要素を多分に含んだエコツアーとして企画し，ゲストに地域環境に関心を持ってもらうことに狙いがあった[2]。当時対応をした入間漁協の副組合長によると，「補助金[3]くれるっていうからやることにしたんだけど，（補助金は）一回だけだったんだよ」というが，一方で，「（ツアー参加費の）お金払って（外来種である）ブラックバスを採ってくれる人なんているのかって思ったね」という。2010年9月11日（土）に入間漁協主催のエコツアー「みんなで守ろう！入間川の魚たち」が実施された。刺し網や地引網でブラックバスを捕獲し，その場で調理をし，いただくというエコツアーであった。評判は上々であり，満足度の高いエコツアーになった。

このエコツアーに関心を持った筆者が，所属する現代文化学部の学部デーのプログラムの一つとして実施をしたい，と飯能市エコツーリズム推進協議会事務局，および入間漁協に持ち掛けた。学部デーの日程が決まっており，時期が11月26日（金）と初冬に差し掛かっていることから，ブラックバスの活動が沈静化するため，初めは難色を示されたが，どうしても実施をしたい，という筆者の願いに「負けた」と，入間漁協組合長はいう。かくして，駿大と入間漁協，飯能市エコツーリズム推進協議会が連携した取り組みがスタートしたのである。3者連携で行われたエコツアーは学生と教員計31名と入間漁協のスタッフ10名，飯能市エコツーリズム推進協議会事務局4名が参加した。当日のエコツアーの内容を記録した事務局のエコツアーメモによると，「飯能市の自然の特徴である川の自然と触れ合うとともに，特定外来種のコクチバスを捕獲することにより，生物多様性の保全や意識向上に貢献する，大きな意義を持つエコツアー」であったと述べられている。

教育効果の高いエコツアーであり，学生にも評価が高かったことから，筆者は継続的な実施を入間漁協に求めた。ただ，やはり実施時期は夏から秋ごろがよい，と入間漁協からの提案があり，2011年度は現代文化学部平井ゼミの活動の一つとして位置づけ，9月に2度行うこととなった。2012年度も同様な形での実施をしたが，本事業の地域貢献度の高さと環境教育的側面に鑑み，2013年度より，全学に開き，アウトキャンパススタディの一環である「まちづくり実践」の一つとして位置づけることとなった。これに伴い，実施時間数の確保が必要となるため，座学と現場実習で24時間以上を確保できるようなスケジュールとし，実施時期としては，8月から9月にかけての平日に実施することになった。内容的には，ブラックバスの駆除だけにスポットを当てていたものを，急激に被害が増加するカワウ[4]への対策を盛り込み，より広い視野で入間川の環境を保全することになった。

なお，2010年から15年までは，「武州・入間川プロジェクト」の活動助成金，16年度は「教育力の駿大」に向けた教育助成費を受け，実施したものである。

３．2016年度の「入間川環境保全活動」について

3－1．活動の概要

2016年度の活動は，従来から行ってきたブラックバスの駆除とカワウ対策を主とした河川環境整備に加え，新たに入間漁協主催行事にスタッフとして参加する内容を追加した。内水面の漁協をより深く理解してもらうとともに，高齢化が進行する漁協の手助けを学生が行うことで，行事自体が活性化することにねらいがあった。座学は，入間

写真１　県水産研究所講師による講義

写真２　川エビを探す学生

漁協組合長の配慮により，埼玉県農林部生産振興課や埼玉県水産研究所からの講師による河川に関わる専門的な講義を受けられることになった。また，活動の前後に「駿大社会人基礎力セルフチェック票」を記入させ，本活動の評価を行った。事前説明会では，20名を超える学生が参加したものの，実際にすべての活動に参加したのは，法学部１名，経済経営学部4名，メディア情報学部3名，現代文化学部5名の計13名であり，全員男子学生であった。

3－2. 時系列にみる活動内容

以下で本活動について，時系列でその内容を示す。

3－2－1. 事前説明と入間川の環境問題について

2016年7月23日（土）13：20から，本活動の説明と入間川の環境問題とその課題について，パワーポイントを用い，筆者が講義を行った。講義後は駿大社会人基礎力セルフチェック票[5]を記入してもらい，その後は現場を確認するため，入間川にて実地研修を行った。

3－2－2. 講義と入間川の生態調査

入間漁協の方々と初めての対面となる2016年8月2日（火）は，入間漁協の事務所がある飯能市林業センターにて，入間漁協組合長と副組合長のあいさつの後，埼玉県水産研究所総務水産行政の担当者より講義があった（写真１）。魚に興味を持ってもらうため，そもそも魚とはどんな生き物

写真３　生物指標となる生物の確認

写真４　調査用ケースで詳しくみる

写真５　川に杭を設置する学生たち

写真６　スタッフとして活動する学生

なのかから始まり，世界には全魚種で28,000種がいること，海水で生活する魚は16,000種だが，海水の割合97.2%から見るとごくわずかしかない淡水の中に12,000種も存在していることとその理由について，豊富な知識をもとに，わかりやすく解説をしていただいた。

午後からは実際に入間川に入り，生態調査を行った。はじめて入間川に入る学生が多く，初めは緊張しているようだったが，川に競り出ている草の間から川エビを見つけたり（写真２），石の裏側にいる川虫をみたりするうちに，自ら積極的に行動するようになった。川虫は環境の状態を見る指標生物ともなっており（写真３，４），カゲロウ目のシロタニガワカゲロウやトンボ目のいわゆるヤゴ，カワゲラ目，トビケラ目など，多くの種を確認でき，生物多様性の一端を垣間見た。

3－2－3. 飯能金魚すくい大会2016のスタッフ

2016年8月6日（土），入間漁協が主催するイベント「飯能金魚すくい大会2016」が飯能河原で行われ，スタッフとして，準備段階から学生が参加した。川に金魚を放流するため，金魚が逃げないようネットで囲むための杭打ちとネット張り（写真５）を担った。3歳から小学生までを対象としたイベント（写真６）で，子どもたちが安全に金魚すくいを体験できるよう，配慮をしつつ行う活動であった。

3－2－4. エコツアー補助スタッフ

2016年8月7日（日），入間川で行われた入間漁協が主催するエコツアー「みんなで守ろう！入間川の魚たち」と「漁協と歩く！入間川リバートレッキング」が同時開催され，前者には法学部，経済経営学部，メディア情報学部の学生8名が，後者には現代文化学部の学生5名が補助スタッフとして活動した。前者はブラックバス駆除を行うことがメインテーマのエコツアー，後者はいつもとは違う視点で入間川を楽しむことがテーマのエコツアーで，学生に対しては，事前に，ゲストとのコミュニケーションをとることや，楽しい雰囲気づくりを醸成するように指示をし，エコツアーにのぞんだ。

15名のゲストがあったブラックバスの駆除作業は，刺し網と地引網で行った。残念ながら，ブラックバスは数匹しか捕獲できず，参加者のモチベーションが上がらない一面もあったが，初めてブラックバスを食べるゲストばかりで，非日常の体験を楽しんでいた。

14名のゲストを迎えたリバートレッキングは，子どもや若い層が多く，川虫を見たり（写真７），川エビを探したり（写真８），刺し網にかかったブラックバスを見たり，ライフジャケットの浮力をつかって川に浮いたりして楽しみながら川をトレッキングした。学生がいたことで，子連れのゲストも安心してエコツアーを楽しんでおり，アンケートには学生への感謝が述べられていた。

写真７　補助スタッフをする学生

写真８　童心に帰って楽しむゲストたち

3－2－5. 講義と刺し網によるブラックバスの駆除

2016年8月18日（木）は，飯能市林業センターに集合し，まず，埼玉県水産研究所研究員による，名栗湖におけるブラックバスの生息数および生態，駆除の現状についての講義を受けた。地道なブラックバス駆除は確実に効果があるものの，複数の手法を組みわせることで効果的に駆除が可能になると述べていた。その後，矢川橋付近で刺し網によるブラックバスの駆除を実施した。まず，川岸近くに鉄製の杭を打ち込み，これに3重になった網を150~200m ほどにわたり仕掛けていく。これが終わると，網と川岸の間の草むらを棒などで刺激し，隠れているブラックバスを網へと追い込んでいく。急いで逃げようと網に刺さるので，刺し網，と呼ぶ。学生たちは漁協のスタッフに教えられながら，ぎこちないながらも一生懸命に作業を行っていた。ブラックバスは20匹ほどが捕獲できた（写真９）が，大きなもので40㎝ほどあり，この個体の内臓を確認したところ，胃の内容物として，アユの稚魚とザリガニが入っていた。在来魚を丸呑みするという話を事前に聞いていたものの，実際に目にした学生たちは驚くとともに，駆除の重要性を再認識したようだった。

捕獲したブラックバスは計測し，三枚に下ろした後，から揚げにした。もともとブラックバスは食を目的として導入した経緯があり（濁川2007），スズキ目でもあり，味は淡泊で美味である[6]。学生たちは初めのうちは恐る恐る手を伸ばしていたものの，「チキンよりもうまい！」と，食していた（写真10）。

写真９　捕獲したブラックバス

写真10　から揚げを食べる学生

写真11　釣りの仕掛けづくり

写真12　釣りの様子

3－2－6. 講義と釣りによるブラックバス駆除

2016年9月7日（水）は，まず飯能市林業センターで，埼玉県農林部生産振興課の職員によるプランクトンに関する講義を受けた。その後，漁協スタッフに指導を受けながら，釣りの仕掛けづくりを行った。透明で細い糸をいとも簡単に釣り針に括り付けていく漁協スタッフ（写真11）に対し，初めて仕掛けを作る学生が大部分であり，試行錯誤しながら，何とか仕掛けを完成させていた。お昼休憩をはさんで，自分で作成した仕掛けを使って，釣りによるブラックバス駆除（写真12）だ。しかし，釣りの経験者は2名ほどしかおらず，ここでも漁協スタッフが一からやり方を教授していた。釣りによるブラックバス駆除の成果は２匹であり，残念な結果となったが，学生と漁協スタッフの密なコミュニケーションが取れたという点では，大変充実した一日となった。

3－2－7. 講義と河川環境の保全活動

最後の活動日となる2016年9月14日（水）は，折からの増水で川の中に入っての活動ができなかった。午前中は埼玉県農林部生産振興課副課長に埼玉県における河川環境とその問題点について講義（写真13）をいただいた。その後，河岸に繁茂した外来植物などを刈り取ったり，ゴミ拾いをしたりするなどの環境保全活動を実施した

今回が活動の最終日ということで，学生たちの熱いリクエストにより，再度ブラックバスのから揚げ（写真14）を作り，いただいた。食べながら，漁協スタッフと語った学生たちは，命を無駄にしないという意識と，地域資源としてのブラックバスの利用について考えていくことの必要性についての意識を高めたようだった。

写真13　講義の様子

写真14　から揚げにしたブラックバス

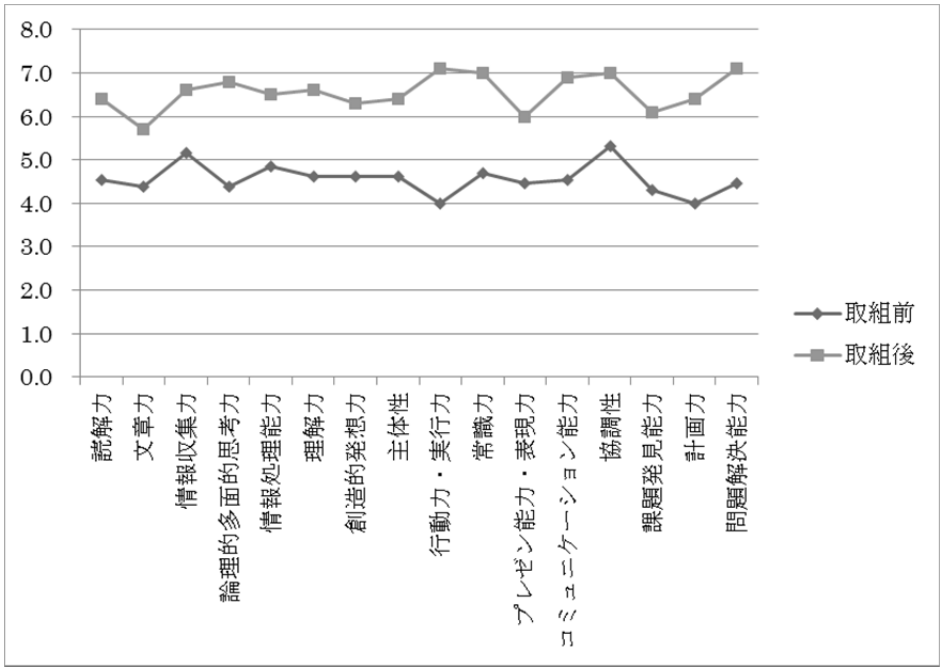

図１　駿大社会人基礎力セルフチェック票に見る活動前後の変化

４．駿大社会人基礎力セルフチェック票に見る活動前後の変化

2016年度は3で述べた内容の活動を行ってきた。本活動の効果を測定する手段として，7月の座学時と，最終活動時に駿大社会人基礎力セルフチェック票に回答してもらった[7]。

それぞれの項目の学生たちの平均値をとった結果（図１）をみると，取組前に4.0ポイントと最も低かった「行動力・実行力」が3.1ポイント上がり，7.1ポイントにアップしていたのを筆頭に，すべての項目でポイントが上昇していた。特に，「問題解決能力」「計画力」「コミュニケーション能力」「論理的多面的思考能力」の伸び率が，2.4～2.6ポイントとなっており，漁協のスタッフやエコツアー参加者，イベント参加者とのかかわりを通じ，これらのポイントが高まったといえる。さらに本活動では直接には指導を行っていない「文章力」「読解力」「プレゼン能力・表現力」などの項目までポイントが上がっていた。入間川環境保全活動を通じ，培われた「行動力・実行力」などへの自信，すなわち自己効力感の高揚が，学生の行動全般にわたって影響を及ぼしたのだろう[8]。体験交流型の学習効果の高さが伺える。

５．本活動の成果と地域と駿大との関わり

環境教育のパイオニアである川嶋（2013）によると，「伝える」には，体験と発見が大切であるとし，言ったかどうかではなく，伝わったかどうかが大事であり，伝えるための工夫を怠ってはならない，としている。本活動は４のアンケート結果を見る限り，入間川における環境保全活動や漁協との協働の意味を，実体験と作業を通じた自らの発見により，理解し，自分の身に付けることができた，すなわち伝わった，といえるだろう。

活動後に学生が提出したレポートを見ると，体験と発見に関わる以下のような記述がみられた。

「活動を重ねるごとに，自分自身でも驚くほどの積極性や実行力がでてきた。（中略）普段体験することのない自然とのふれあいや交流することのない地域活動を行っている目上の方との交流を可能にしたこの活動は，とても濃厚で充実した体験

ができたと感じる」(現代文化学部2年 A)
「内水面漁協さんの存在や重要性，ブラックバスをはじめとする河川環境とその課題，捕獲の仕方，食べ方まで，やらなくては絶対わからないことを知ることができた。今回の経験を活かし，いろいろなことにチャレンジして行こうと思った」(経済経営学部2年)
「今回の活動で川の生態系についてとその課題について学んだ。今後，川を見たら今回の活動を思い出し，環境について，これからも考えていきたい」(法学部2年)

また，人と人とのつながりについて，「漁協の皆さんの温かさ，地域の方々の協力を得て，たくさん関わることができて，この駿大でしかできない経験ができたと思います」(現代文化学部2年 B)や「飯能市や地元漁協と連携するというのは駿大としてとても良いと思う」(現代文化学部2年 C)と述べている。地域と関わることの重要性について，身をもって理解したといえよう。

一方で，漁協スタッフからは，「若い学生と一緒だと元気が出るんだよなぁ」(70代男性)，「駿大の学生がこうやってがんばってくれるんだから，俺らもがんばらないと」(80代男性)，「若いのが美味しそうに（ブラックバスの唐揚げを）食べていると，こっちも食欲が出る」(60代男性）など，学生が関わることで，同じような作業でもやりがいや気持ちの高揚がみられた。組合長曰く，「漁協は高齢化が進んでいるため，50代の組合員でも若手という扱い。学生と連携することで皆張り切るし，笑顔になる。漁協，特に内水面漁協と大学との連携は知る限り他ではみられない。今後も引き続き一緒に活動してもらいたい」と継続的な連携に積極的である。

駿大に対しては，これまでにテレビ埼玉の「ごごたま」や文化新聞，埼玉新聞，全国内水面漁協機関紙などで本活動が取り上げられており，大学の知名度や好感度のアップに貢献してきた。一方で，7年も継続して活動し，毎年ホームページ上で紹介しているものの，筆者の努力不足もあり，学内での知名度は低いと言わざるを得ない。「エコ」「環境」というイメージを持つ活動としては広報の有効な手段となり得るツールであるため，積極的なアピール活動を働きかけていきたい。

６．まとめ

第二次安倍政権で掲げられた「地方創生」を待つまでもなく，地域の自立性を高め，活性化させることが，日本にとって重要な課題であり，急務となっていることは明白である。先述の COC 事業も相まって，地域と大学との連携は，愛媛大学での事例（大西ほか編　2016）など国立大学をはじめ多くの地域で取り組まれており，それぞれに試行錯誤しながらも，成果を上げつつある。

筆者は7年にわたり駿大において本活動に取り組み，地域での活動の教育力に期待し，学生という未熟な大人を帯同し，地域に入りこんできた。学生は時に迷惑な存在ともなり得るし，時に地域は変化を嫌う。しかし大学が，学生が，地域に入ることで，少しずつではあるが，でも確実にインパクトを与えることはでき，ここを糸口として地域が変化し，好転するきっかけとなり得る。学生にとって，地域の教育力に基づく実学が，社会人基礎力を育成する有効な手段であることは，本論で明らかだろう。駿大ではこの重要性を早い段階から意識し，授業の一環として「まちづくり実践」などをカリキュラムに取り込んできた。これを今後引き続き駿大のウリとするには，地域とのつながりと信頼関係の構築が不可欠である。しかし，現在，当初の理念や想いが薄れつつあるように思われる。大学は地方創生のカギとなる立場にあるということを再確認し，本当の意味での「教育力」の向上を目指していくべきだと思う。非力ではあるが，筆者は引き続きその一端を担っていきたいと思う。

謝辞：本活動に当たり，入間漁協組合長古島照夫氏をはじめとする漁協，埼玉県農林部生産振興課，埼玉県水産研究所の皆さまには，様々な面でご協力いただきました。この場をお借りして，深

くお礼申し上げます。

なお，本稿執筆に際し，使用したアンケート，コメント，画像については，事前に承諾を得たことを付記しておく。

参考文献

池辺さやか・三國牧子（2014）自己効力感研究の現状と今後の可能性，159－174pp，九州産業大学国際文化学部紀要

大西正志・竹内康博・佐藤亮子・山口信夫・米田誠司・宇都宮千穂編（2016）地域と連携する大学教育の挑戦－愛媛大学法文学部総合政策学科地域・観光まちづくりコースの軌跡―，株式会社ぺりかん社

川嶋直（2013）KP 法―シンプルに伝える紙芝居プレゼンテーション，みくに出版

立澤史郎（2009）「外来対在来」を問う―地域社会のなかの外来種，111－129 pp，環境倫理学東大出版会

濁川孝志（2007）ブラックバス問題の真相，牧歌舎

注

[1] ブラックバスとは，スズキ目サンフィッシュ科の淡水魚で，入間川では，コクチバス，オオクチバス，ブルーギルを指す総称である。

[2] 外来種問題は利害関係もあり，多様な価値観の調整が必要となる（立澤　2009）。特にブラックバスは釣り人にとって人気がある魚種であるが，環境省が定める特定外来種であり，世界で猛威を振るっている外来種であることを踏まえ，本論では駆除対象であるとの認識で論を進める。

[3] エコツーリズムに新たに参入する事業者に対し，エコツーリズム開始時の準備金として市より，最大100,000円を支出した。現在は減額され，最大60,000円となっている。

[4] カワウ Phalacrocorax carbo 体長80㎝ほどのウ科の鳥で，1970年代には絶滅が危惧されていたが，1980年代になると分布が拡大，増加に転じた。現在詳細は明らかではないが，全国450か所に分布しているといい，水産庁，環境省が個体数調整を進めている。

[5] 別添資料参照。

[6] ブラックバスを地域資源として活用する事例もある。例えば滋賀県立琵琶湖博物館内レストランでは，琵琶湖で捕獲されたブラックバス（オオクチバス）を丼や定食として販売している。

[7] 13名の出席だったが，1名が回答をしなかったため，12名の平均値を示している。

[8] 池辺・三國（2014）による。

※後で提出となります。書き忘れないように　→　　学籍番号〔　　〕　氏名〔　　〕

「駿大社会人基礎力」セルフチェック票

Q　下記のQ1～Q16について、それぞれ1～9の選択肢の中であなたはどれに近いと思いますか。
＊文章のない偶数は、その前後の奇数の中間程度と考えてください。〔例：2は1と3の中間程度〕

Q1）読解力(文章を適切に読み解く力)

- 1　文章を読んでも、何が書いてあるかや書き手が何を言いたいのかをきちんとつかめないことが多い
- 2
- 3　内容が易しかったり関心のあるテーマについては、何が書いてあるかや書き手が言いたいことをつかむことができる
- 4
- 5　大抵の場合には、文章を読んで何が書いてあるかや書き手の言いたいことを理解することができる
- 6
- 7　量が多かったり高度な内容の文章でもきちんと読み、何が書いてあるかや書き手の言いたいことを理解することができる
- 8
- 9　量が多かったり高度な内容の文章でも、何が書いてあるかや書き手の言いたいことを的確に理解し、それを自分の言葉に置き換えてまとめることができる

Q2）文章力(論理的で、かつわかりやすい文章を書くことができる力。レポート、論文、発表の資料などわかり易くまとめることができる)

- 1　自分の考えや感じたことを文章で表現しようと思っても、どういう言葉を選べばよいかわからず全くうまく書けない
- 2
- 3　思いつくままに言葉を選んで書いてしまうなど、相手に自分の考えが伝わらない文章を書くことが多い
- 4
- 5　自分の考えを自分なりに整理して文章にすることができる
- 6
- 7　自分の考えを整理し、筋道を立てて文章にすることができる
- 8
- 9　自分の考えだけでなくレポートや論文などを、目的や読者に合わせてわかり易く、かつ説得力のある文章にまとめることができる

Q3）情報収集力(目的(達成)に向けて情報源と情報収集方法を適切に選択し、必要な情報を集める力)

- 1　目的(達成)に向けてどのような情報をどのように集めれば良いか、なかなか思いつかないことが多い
- 2
- 3　目的に向けた情報収集の範囲が限定的である
- 4
- 5　目的に対して、自分の思いつくままに様々な方法で情報を集めることができる
- 6
- 7　目的(達成)に向けて、どんな観点が必要かを検討したうえで、幅広く情報を集めることができる
- 8
- 9　日頃から(学業、社会活動、仕事などに関連する)幅広い情報に関心を持ち、収集したり、蓄積したり、人脈を拡げることを怠らない

Q4）論理的・多面的思考力(様々な角度から物事をみつめ、広い視野から筋道を立てて考えることができる力)

- 1　物事に対して、「本当にそうなのか？」「なぜ、そうなるのか？」「他にも別の考え方はないのか？」といったことを考えることはほとんどない
- 2
- 3　物事に対して、「本当にそうなのか？」「なぜ、そうなるのか？」「他にも別の考え方はないのか？」といったことを考えようとはしているが、どちらかというと苦手な方である
- 4
- 5　結論に至る手前で挫折することもあるが、物事に対して、「本当にそうなのか？」「なぜ、そうなるのか？」「他にも別の考え方はないのか？」と考えることができる
- 6
- 7　ある程度、納得がいく自分なりの結論を導くまで、物事に疑問を持って推論することができる
- 8
- 9　様々な角度から推論することにより、筋道を立てて結論まで導くことができる

Q5）情報処理能力(入手した情報から必要なものを適切に選びとり、またそれを自分が使える材料として処理する力)

- 1　せっかく手に入れた情報であってもすぐに忘れてしまったり、どう処理すれば良いのかわからず、そのまま放置してしまうことが多い
- 2
- 3　入手した情報の中で何が必要なのかを自分なりに見極めようと思っているがうまくいかないことがある
- 4
- 5　入手した情報をきちんと見極めて必要なものを選びとることができる
- 6
- 7　入手した情報から必要なものを選びとることができ、さらにそれを活用しようという意識を持つことができる
- 8
- 9　様々な情報源から知りえた情報を吟味し、必要なものを適切に見極めた上で必要なときにそれを活用することができる

Q6）理解力(相手の話す内容、または自分や相手の置かれている状況を適切に理解する力)

- 1　相手の話していることを誤解したり、理解できなかったりすることが多い。自分(または相手)の置かれた状況についてあまり考えることなく、何かを言ったり行動してしまうことが多い
- 2
- 3　相手の話していることや自分(または相手)の置かれた状況について理解することを心がけているつもりだ
- 4
- 5　相手の話していることや自分(または相手)の置かれた状況について、ある程度理解することができる
- 6
- 7　相手の話している内容や意図、背景などについて理解できる。自分(または相手)の置かれた状況を把握することができる
- 8
- 9　相手の話している内容や意図、背景などについて的確に理解できる。自分(または相手)の置かれた状況を適切に把握し、さらに自分に求められていること(または相手のためにするべきこと)を察することができる

Q7）創造的発想力(既存の枠組みにとらわれず、柔軟に考えて新たなアイディアを生み出す力)

- 1　自分の考えやアイディアを出すことが求められる場面でもそれらが全く思い浮かばないことが多い
- 2
- 3　自分の考えやアイディアを出すことは出すが、既存の考えや置かれている状況にとらわれてしまうことが多い
- 4
- 5　物事を考える時には、出来るだけ制約条件や過去の習慣にとらわれないよう心がけることができる
- 6
- 7　自分の考えやアイディアを出すことを求められる場面では、多くのアイディアや異質なアイディアを発想することができる
- 8
- 9　他人のアイディアを参考にし、自分のアイディアと組み合わせるなどしてより良質なアイディアに発展させることができる

Q8）主体性(行動を起こすことの価値を理解した上で、やらされるのではなく自ら行動を起こす力)

- 1　何かしなければならない状況があっても全く動く気になれない、もしくはならない
- 2
- 3　多少いやなことでも、やらなければならないことは、嫌々ながらも行動に移す方だ
- 4
- 5　自分がやらなければいけないことは直ぐ実行するが、やったほうが良いと思うくらいのことでは、自らすすんで行動することは少ない
- 6
- 7　やらなければならないことだけではなく、やったほうがいいことについても誰かがやるのを期待するのではなく、自らすすんで取り組んでいく方だ
- 8
- 9　やらなければならないことだけではなく、やったほうがいいことについても躊躇せず、すぐに行動に移すことが多い

Q9）行動力・実行力（目標に向かって粘り強く取り組み、必要に応じて課題に柔軟に対応しながら、やりきる力）

	1	一度始めても、すぐに面倒になってやめてしまったり、我慢が続かないことが多い
	2	
	3	いったん始めたことは一応それなりに続けるものの、継続や我慢ができず途中でやめてしまうことがある
	4	
	5	いったん始めたことはある程度まで続けられる
	6	
	7	強い希望や支えがあれば、目標達成まで粘り強く行動や努力を続けることができる
	8	
	9	目標に向かって粘り強く取り組み、壁や障害があっても柔軟に対応しながら、自分の納得がいくまでやりぬくことができる

Q10）常識力（公序良俗・社会生活上のマナーやルールに則って自らの発言や行動を律することができる力）

	1	自分の都合を優先して、守るべき集団のマナー・ルールを無視することが多い
	2	
	3	守るべき集団のマナー・ルールは意識して考えるが、場合によっては無視することもある
	4	
	5	守るべき集団のマナー・ルールがある場合、これに従うように行動している
	6	
	7	周囲が守るべきマナー・ルールに違反していても、自分は違反しない
	8	
	9	周囲が守るべきマナー・ルールに違反していた場合、自分が違反しないでいるだけでなく、周囲に働きかけて全体の行動修正をすることができる

Q11）プレゼンテーション能力・表現力（自分が相手に伝えたい内容をわかりやすく表現し、伝える力）

	1	調べたことや伝えたいことを発表するときに、どのような言葉や具体例、または資料やデータを使えばよいのか全くイメージできない
	2	
	3	思いつくままに書いたり話したりするので、相手に自分の考えが伝わらないことが多い
	4	
	5	発表に必要な資料を準備しようとするのだが、そのまとめかたや発表の仕方にはまだまだ改善点があると感じている
	6	
	7	発表のための準備を自分なりに整えて、緊張しながらもしっかりとプレゼンテーションすることができる
	8	
	9	プレゼンテーションの相手や目的に合わせて、効果的な方法で発表内容を組み立て、資料を準備してわかりやすく発表することができる

Q12）コミュニケーション能力（相手の要求を適切に理解して、それに応じたり、自分の意見を適切に主張したりすることによって、良好な人間関係を構築する力）

	1	直感や思いつきで発言しがちで、説明が不足し話が伝わらないことが多い
	2	
	3	自分の考えを整理しきれず、相手に上手く説明できないことが多い
	4	
	5	自分の考えを、自分なりに整理し、筋道を立てて伝えることができる
	6	
	7	自分の考えを、相手の関心に合わせて、それぞれに分かりやすく伝えることができる
	8	
	9	自分の考えを、意思・情熱を込めて、相手に分かりやすく明快に伝えることができる

Q13）協調性（自分や周囲の役割を理解し適切に分担する力、互いに連携・協力して物事を行う力）

	1	集団の中で割り当てられたことであっても、無責任にやらないことがある
	2	
	3	集団の中で割り当てられたことは、人から非難されない程度に取りくむ
	4	
	5	自分に割り当てられた役割は、精一杯取りくもうとする
	6	
	7	自分の役割だけにとどまらず、成果を上げるために必要なことを考えて取りくむことができる
	8	
	9	自分の役割だけにとどまらず、成果を上げるために必要なことを考えて、周囲と分担・協力しながら取りくむことができる

Q14）課題発見能力（自分や自分の身のまわり、あるいは社会のあるべき姿と現状を適切に認識し、問題意識を持つことができる）

	1	日常生活の中で、自分や自分の身のまわりなどのことについて、「もっとこうすればよいのに」「もっとこうなればよいのに」といった問題意識を持つことはほとんどない
	2	
	3	日常生活の中で、自分や自分の身のまわりなどのことについて、「もっとこうすればよいのに」「もっとこうなればよいのに」と感じたり、ぼやいたりする
	4	
	5	自分や自分の身のまわりなどのことについて、「こうするべきだ」と感じることが多い
	6	
	7	自分や自分の身のまわりなどのことについて、あるべき姿と現状をある程度把握できる
	8	
	9	自分や自分の身のまわりなどのことについて、あるべき姿と現状を的確に認識し、何が課題となっているかを適切に把握できる

Q15）計画力（実現可能な目標を設定し、そこに至る方策を立てることができる力）

	1	何かに取りくむときには、目標や計画を立てずに始めることが多い
	2	
	3	何かに取りくむときには、目標や計画をばくぜんと決めている
	4	
	5	最良の方法かどうかはよくわからないが、何かに取りくむときには目標や計画を決めることができる
	6	
	7	何かに取りくむときには、ある程度実現可能だろうと思える目標に向けた計画を立てるようにしている
	8	
	9	何かに取りくむときには、実現可能な目標に向けた適切な計画を立てることができる

Q16）問題解決能力（逐次状況を把握し、問題解決に向けて努力を継続する力）

	1	うまくいっていない状況があるときに、解決に向けた行動を起こすことが苦手である。また行動を起こすことができたとしても、うまくいかないことが多い
	2	
	3	苦手意識はあるものの、何か問題があればその解決に向けてとりあえず動こうとする。しかし、それがうまくいっているかどうかについてはよくわからず、どちらかというとあまりうまくいっていない気がする
	4	
	5	それが得意とまではいかないが、何かの問題を感じたら解決に向けた行動を何かしらとっている。なんとなくだが、うまくいくこともそれなりにある
	6	
	7	何か問題を感じたら、できるだけその解決に向けて行動をするようにしている。そしてそれがうまくいっているかどうかについて、ある程度把握できる
	8	
	9	問題解決のために必要な行動を起こすことができる。さらにうまくいかないことがあれば、なぜうまくいかなかったかを考えて、引き続き解決に向けて努力を継続することができる